

6がつのくもの子の会だより

〈令和元年、5・27〉

令和にはあって、新しい元号の時代の訪れと、季節も春と
なるの春本番という5月の、三つよい気候のはずが、朝はひやり
していても、日中は、真夏日の暑さで、早くも熱中症注意のこぼ
が、いわれている程、自然は、大きく変動しています...。(人間社会の
大きな変化により、自然も...)と私は感じています、みなさん(は)思われませんか...
〜5月に載せた、子育ての「5つのタブー」、子どもとの話し方の原則について〜

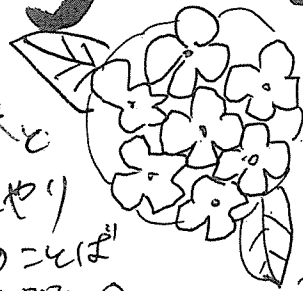
〈第2のタブー、子どもの行動の露払いをしないか〉

子どもの日常生活を一つひとつ具体的にコメントに指導するやり方です。
たとえば、私の診察室に子どもとお母さんが入ってきます。すると入った
とたん、お母さんが子どもに、「ごあいさつしなさい」と言うんです。
話がなかなかすすまないと、「後に患者さんがたこさん待っている
から、もっと早く話をしなさい」と言ったり、終わって出るときは「ちゃんと
ごあいさつして出なさいよ」とか、一つひとつ行動の「し先」を指図する
のです。

これを、私は「子どもの行く道の露払いをする親」と言っています。
これは、親が子どもの通る道を掃きながら、「ここを通りなさい」と
言っているようなものです。

こういう事例は日常生活でもよく見かけます。たとえば電車に
乗るときに、「そ、大きく開いてるから気をつけなさい」と言う。言われ
なくても子どもはちゃんと気をつけて電車に乗ろうとしているのに、ちよと
先を注意する。

これは、学校の先生にも多いのではないしょうか。「はい、



これをやりなさい。それが終わったら、次はこれをやり
なさい」と。そのおりに指示したとおりにやっていると、
大人は安心する。子どもにとっても指示されたとおりに
や、ていねい可事も起こらないから、そういうものだと思っ
てしまう。

ところが、そういう子は大人が何も言わないと、「お母さん
今度はどうするの」とか「先生、次はどうしたらいいんですか、
と何でも大人に聞くおりになる。これでは、当然のこと
ながら、自分の頭で考え、行動するという主体性、
自立性が育ちませんし、何ごとにも人を頼りにするという
発想が定着してくる。小学校では、素直でおとなしい
子で通っているのですが、そういう経路を経て中学生
になると、いろいろと壁にぶつかってしまっています。

(中略)

こういう子どもが、たとえば登校拒否などになると
赤ちゃん返りしてしまうことが多いのです。幼児の頃に
親に甘えて、もう一度、幼児期の「ボク、自分でやる!」
と主張する段階から成長しななうと自立できなないのです。
そんな子どもの相談を受けたとき、私は、「お母さん、
小さいときから口数が多かったでしょう」と話すが、
「そのとおりでした」とそのときはうなずきます。でも、帰り
には、もう何やら指図しているという具合ですから、
おもしろいのです。やはり口数が多いうちから非常に
困った関係がつかうているのです。(次つづく)



< 子どもの話し方 三原則 >

大人は、子どもがいろいろな体験をし、ストレスを乗り越えていく
うえで、子どもの「いい聞き手」になることが大切です。

～ 大人は口数を減らしなさい ～

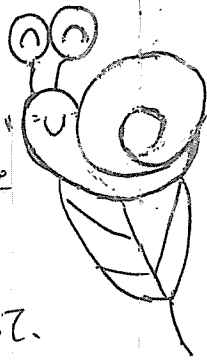
前の、5つのタグーの中の「露払い」の話とも関連しすが、
現在の大人は、親も先生も口数が多すぎます。だから、
大人の話しの中身はともかく、まず、口数を減らすことです。
私たち大人は、子どもの行動を見て、100%返すものだから、子どもの
行動のちよと先を言ってほう、という話をしました。たとえば、
小学生の子供が、「お母さん、ただいま」と帰ってくる。すると
お母さんは「おかえり」と言う。二までならいいのですが、普通は
さ、と、「靴はちゃんと履いてるのよ」とか、「足を雑巾でふいて、
とか、さらには、「手をあらって」、「夕オレでちゃんとふくのよ」と言て、
「こちらへおいで、おやつがあるから」となります。

ホッと子どもが、おやつを食べはじめると、「学校はどう
だった」「テストは可点だった」と。なんともささいなこと(さう)。

お母さんは、子どもが帰ってきたときは、「おかえりなさい」と
明るく、ニコニコして声をかける、それだけでいいのです。

さて、口数を減らすと聞いてきたら、どれくらい減らすか。
まず、今の半分に減らす。あとは聞くことにつとめるという
こと(さう)。もちろん、なかに三分の一に減らしたほうがいいお母
さん方もいるかと思いますが。

でも、この口数を減らすというよりは、簡単なこと(さう)で、
実行するのは、結構おもしろいものです。そのために、大人はどう
すればいいかという話ですが、「しほ子前にうて呼吸おいて、おど
から話す」ということ(さう)。(伊藤田各) (キレる子、キレない子
精神科医からのメッセージ)



(No.2 令和元年6月号(もろ子会))

◎5月にはいて、新しい参加者ありで、また、仲間が
ふたぎのような嬉しい出だしの令和元年のくも子会です。
ちょうど家族参加された日に、うちの園の年少の
二のさんのスキップ記念日をする事ができました。(5/17)
小さな森のこも園では、「スキップ」ができることも、子ども達
の育ちの中で大切にしています。

大人も、嬉しい時なんかには、スキップしたくなる時
ないですか?嬉しくてスキップしたくなるような気分、気持ち
がある(さう)に、子ども達にとっては、もっとプラスになるもの(さう)
私は思っています。

今までの保育でも、おどきと、スキップができる前と
できた後の日常の生活やカリキュラム活動に取り組み
姿勢や姿、表情は、は、きりと違ってると感じています。
できた喜び、そして、それを お母さんに見せたい、同時に
身近に共に楽しみたい、お友だちも一緒、そして、それ以
外に知らない人や、お友だちの方たちにも注目をせよ
える(さう)で、その子にとって、そのスキップした自信と
なっていくと私は思っています。これは、スキップに限らず
いろいろなことでもいえる(さう)ではない(さう)ですが、発達段階
の大きな節目として、肉体的にも精神的にもアップ(さう)
あらかたの時とも思っています。この5/17の二のさんの
スキップは、違う足はびか(さう)も(さう)した(さう)か、お母さんも
来ていた(さう)さ、目の前(さう)で、見守られ、他の方たちにも
見守れる(さう)中で、二の(さう)に、おど(さう)く大きな時間と
な(さう)ってこれ(さう)に(さう)思(さう)います。ありがた(さう)ございました。